

代表作③ 時代小説

日本文藝家協会編



日本文藝家協会編

代表作時代小説

第三卷

編纂委員

萱原宏一

松本清張

土師清二

海音寺潮五郎

富田常雄

村上元三

東京文藝社

代表作時代小説 普及版 九五〇円

第三卷

昭和五十三年七月三十日発行

編纂者 日本文藝家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

本社 東京都新宿区大久保二六―三

出張所 東京都新宿区弘方町一番地

振替・東京六一二七五七

電話・(二六〇)二五五〇

0093—789803—5170

無検印承認

ま え が き

文壇とか、中間小説とか、そういうことを論議する必要は、ここにはない。

この集に収めた作品を、長篇をすべて外した以上、厳密な意味での時代小説の代表作とはいえないだろうが、文芸家協会の助力を得て、編纂委員の責任で選んだ。今回はアンケートを取ることをしなかつたのは、在来、アンケートを集めた結果を見てのことであり、それよりも委員の責任で編纂をしようということになつたからであつた。

そうなれば編纂委員は自作を提出するのを遠慮すべきであろうし、委員たちもその説だつたが、出版元の意向もあつて、こういう収録になつた。

このごろは、時代小説がさかんだ、といわれる。しかし、わたしなどは必ずしもそうだとは思えな

い。安易な時代読物が氾濫している、というのなら同意だが、その責任の一端はわれわれも負わなくてはならないかも知れない。

小説が面白くなかった、という声をよく聞く。その説に対して、この一冊に収めた二十篇の作品を、答えとしてもいい。

昭和三十三年九月

村上元三

目

次

犬坊狂乱	井上靖	七
奈良の神鹿	土師清二	元
三代目扇歌と女	長谷川伸	四七
鳥人傳	新田次郎	六九
勝負	富田常雄	一〇三
貞女の碑	和田傳	一二五
君子三楽	海音寺潮五郎	一三五
戦国夜話	中山義秀	一五五
鉄砲商人	南條範夫	一六三
白子屋騒動	村上元三	一六九
博戯	村雨退二郎	二〇七

筑 医 者 山手樹一郎 三二

並 木 河 岸 山本周五郎 三二

い び き 松本清張 三九

剣 術 陽 炎 五味康祐 三〇

寵 臣 佐藤明子 三一

かたくり 献上 柴田錬三郎 三三

地 獄 の 鬼 と 子母澤寛 三七

槍 一 本 火野葦平 三九

呂 宋 の 壺 久生十蘭 四五

まえがき
あとがき
村上元三
吉田健一

犬いぬ

坊ぼう

狂きやう

乱らん

井

上

靖

作者のことは

犬坊狂乱について

井上靖

室町時代の末期に、信濃の伊那郡伊賀良庄新野に起り、後に和知野に城を構えて十九ヶ村三千貫の地を領有した豪族関氏の興亡の事実を記した「関伝記」という書物のあることを聞いたのは角川書店の下島正夫氏からである。そして下島氏を煩わして、「伊那史料叢書」の中に収められてある「関伝記」を手に入れて戴いた。

関伝記の原本は上、中、下三巻より成り、安永元年伊那郡坂部邑の熊谷直退の編纂にかかると、当時信州の南部に勢力を振った関氏の跡をたずねるには唯一の資料である。

この書物の中巻の巻頭に「下条家蓑美并犬坊変死之事」という一項があり、犬坊のことが僅かであるが記録されている。これを読んだ時、犬坊という若者の変死のことが、いかにも戦国時代の信濃の片隅にでも起りそうな事件として、私の心に残った。それから後日「熊谷家伝記」にも大同小異の記載のあることを知った。

小説「犬坊狂乱」は犬坊に関する記録をもとにして作った創作である。実際の犬坊が果して私の描いたような性格の若者であつたかどうかは判らない。併し、「関伝記」の短い記録からは、私は私の描いた犬坊以外のいかなる若者をも想像することはできない。記録を読んだ最初の時から人物のイメージが決まっていたので、私は「犬坊狂乱」を二晩程でらくに書いた。掲載したのは小説公園の三十二年三月号である。

著者略歴

東京都品川区大井滝王子町四四八三

明治四十年五月六日静岡生

沼津中学、四高を経て、京大文学部哲学科（専攻美学）卒業。毎日新聞大阪編輯局に勤務、新聞記者生活十四年、昭和二十四年後半期の芥川賞受賞と共に文筆生活に入る。主な著書「狼銃・闘牛」「ある偽作家の生涯」「青衣の人」「戦国無頼」「異域の人」「風林火山」「黒い蝶」「姨捨」「あした来る人」「孤猿」「射程」

（現住所）〒156世田谷区松平二〇

天文十年九月五日のことである。

天竜川の青黒い急湍を底に沈めてゐる南伊那の溪谷に散らばつてゐる十八ヶ村へ、この地方一帯を領してゐる豪族関新蔵国盛の掬る和知野城からの急触れがあつた。関氏とその勢力を隣接してゐる下条勢が和知野城へ取り懸るといふ情報があるので、各村の郷主たちはそれぞれ手勢のすべてを引き連れて、すぐ城へ詰めるやうにといふことであつた。

城の所在地である和知野村を含めて、新野、向方、福島、長沼の五ヶ村は関の古本領と称ばれて、関氏と関係深き一族が率^すべてをり、河田、神子谷、御供、小野、平久、早稻田、井戸、鴨目、上栗の九ヶ村は古代郷主と称ばれてゐるやはり関氏と古くから関係を持つ七人の管轄であり、坂部、市原、大谷、河内の四ヶ村は二年前から関領となつた許りの村で、別村と称ばれてゐる。このほかにこの年になつてから関氏に属した鷺津、浅野、門原、小中尾、田上、大森、深見、千本、大平の九ヶ村があるが、これらは今のところはまだ軍役を免ぜられてゐる。

百姓とも武士とも見分けのつかぬ男たちは、山を攀じたり、谷を下つたり、尾根の道を駆けたりして、それぞれ命じられてゐる部落の入口に辿り着くと、そこで申し合せたやうにちよつと立ち停まり、

「合戦ぢや、合戦ぢや」

と、ありつたけの声を振りしぼつて嘯鳴り、それからちよつと弾みをつけるやうに跳び上がつて駆け出すと、あとはいやにひつそりとしてゐる部落の中へと真直ぐに吸ひ込まれて行つた。

関氏は、現在二十七ヶ村を幕下とし、村高三千二百五十二貫を領してゐる。城は、砦といつても館といつても通りさうな小さい構へであるが、和知野川が天竜川へ合流する天險の地を占めてゐる。関氏は現在の関新蔵国盛で四代であるが、漸く近年その勢が強大となり、今から三年前の天文七年に、それまで住んでゐた新野の城砦を廃して、その両側に天竜の流れを廻らした丘陵に築城して、和知野権現城と名付けたのである。

関氏と下条氏との小規模の衝突は以前から、度々繰り返されてゐた。狭い伊那溪谷でお互ひに近隣をその勢力下に収めつつあつた両豪族は、いつか一度は本格的に雌雄を決しなければならぬ運命を持つてゐた。

関氏の初代盛春がこの伊那溪谷に落ちて来たのは文安五年のことである。盛春は伊勢の国の浪人であつたが、土地の農民に推されて、新野村に住して、その周辺五ヶ村の統領となり、七十歳で歿した。次は嫡子盛国が家督を継ぎ、名を遠江守盛貞と改め、その館を日差城と号した。ここに関氏は漸く豪族らしい貫録を持ち始めたのである。この人物が百九歳といふ長寿を全うして歿すると、嫡子盛経が家を継いだ。三代安芸守盛経は下条家と闘ひ、八ヶ村を押領し、矢草の城を築き、更に上田城に移り、三度いまの和知野城へと移つたが、老齡となつたので、現在はその子国盛が一切の権力を掌握してゐる。

いつ頃から国盛が父に替つて采配を揮ひ出したか不明であるが、世間ではもう何年も以前からではないかと見てゐる。国盛は今年二十七歳であるが、性狂暴、征服慾強く、いつまでも父の命令の許に動くやうな人物ではなかつたからである。現在の和知野権現城移住の直後、まだ壁も乾かぬうちに門の扉に貼紙されたことがある。

新造（蔵）といへど位のないあられの子、親さへ今はせきあくの守

国盛といへど短氣の子守どの、打つ叩いつ泣かせこそすれ

これに依つても判るやうに、新蔵国盛は領民の間にはひどく評判が悪い。父安芸守までがその悪評のそば杖をくつてゐる恰好である。併し、国盛は領民に苛酷な加役をして、恨まれやうが憎まれやうが、伊那全域を支配する根拠地として権現城を造らなければならなかつたのである。彼は今年になつてから強引に新しく九ヶ村を己が勢力下に収めたが、それもこの権現城に依つて示された武威の賜物であつた。

北方に隣接してゐる豪族下条時氏のこんどの挑戦は、血気にはやる新蔵国盛に取つては願つてもないことであつた。

急触れを出してから半刻後、彼は櫓の上に立つて、城へと集つて来る幾つもの小集団の農兵たちをじつと見降ろしてゐた。

「野郎共、早く集りやあれ」

やがて、赤ら顔の顎骨の張つた眼の鋭い二十七歳の青年武將は低く呻くやうに口から出した。領主の口にする言葉ではなかつた。

領主も領主らしくなかつたが、権現城の城門前の広場へ集つて来つたある武士たちも一向に武士らしくはなかつた。服装はひどくまちまちだつた。大部分がそのまま鍬をかついても、山仕事に出掛けてもをかしくないでちかつた。頬かぶりをしてゐるものもあれば、鉢巻をしてゐるものもあつた。それでも一応武具らしいものは身につけてゐるが、脛当がなかつたり、籠手がなかつたりして、満足な恰好をしてゐる者はなかつた。そのせゐか、ふしぎにそれらは武具には見えず、山仕事や野良仕事の仕事着に見えた。

関新蔵国盛は城門前の広場に到着した兵力を檢閲した。下郷諸部落の人数三百六十余人、上郷五百余人、併せて八百六十余人である。勢揃ひすると、すぐ城から四五町離れた和知野川端に繰り出し、そこに三つの集団になつて屯ろし、下条勢の到着を待った。

半刻程して、敵の第一陣と思はれる部隊三百がやたらに鯨波くじなみを上げながら駆け込んできると、対岸の礮に布陣した。指揮者は下条時氏の嫡子幸菊丸で、馬に跨つてはゐるが、まだ十三歳の児前髪こさげの少年である。

關勢から鎌倉兵太夫といふ無双の大力をもつて知られた武士が、真先きに進み出て、流れへ二三間踏み入れたところで、大音声で対岸へ呼びかけた。

「時氏御出馬と承つて一入楽しみにして参つたが、児若衆の御出張とは片腹痛い。合戦は取りやめて、石投げして遊ぶことにする。左様承知されたい」

その声が終るか終らないうちに、關氏の陣から対岸へ夥しい石が飛んだ。これが合戦の合図であつた。

關勢のうち約五百がいつせいに水しぶきを上げて流れを渡り出した。これと同時に下条勢三百もまた流れに踏み込んで来た。

忽ちにして両軍の人数は川の中央部の瀬で入り乱れた。刀と槍とが午下がりの秋の陽に輝き、水しぶきは到るところに起り、それもまた陽に輝いてゐた。叫声と喚声は河瀬の音に混じつて聞えた。そして戦鬪の行はれてゐる区域を除いて、和知野川はその上流も下流も、白い磧を抱き、所々に川波のきらめきを見せて、戦鬪をよそに静かに流れてゐた。

川の中での合戦は長くは続かなかつた。兵力の多い関勢が初めから下条勢を押して、修羅場は間もなく対岸の白い磧へ移動した。併し、ここでもまた合戦は長くは続かなかつた。あつといふ間に崩れたつた下条勢は体勢を立て直す暇がなく、磧から丘陵へ上がり、そしてその丘からも後退すると、あとは原野の中を走つてゐる往還に沿つてわれがちに退却し始めた。踏みとどまつて鬪はうとする者はなかつた。逃げるに真剣だつた。

二百人程の関勢が逃げる下条勢を追つてゐた。一里程駆けたところで駆けるのに疲れた下条勢の一部は已むなく踏みとどまつて関勢を迎へ撃つた。ここで小戦鬪が展開された。何人かが倒れた。そして下条の主力はまた崩れて駆け出した。

「返せ」

「長追ひするな」

「引返せ」

追手の関勢の中からさういふ幾つかの声が起つてゐる。長追ひすることは確かに危険であつた。ここまで来ると下条の領地であつたし、いつどこから伏兵が現れて来ないとも限らなかつた。この命令で追手の三分の二は踏みとどまつたが、残りの三分の一の雑兵たちは自分自身でもどうすることもできない昂奮に駆られて、そのまま逃げる下条勢を追つて駆け続けた。

更に一里程駆けたところで、再び小戦鬪が展開した。こんどは両軍合せて四五十人程の斬合だつた。

この時もまた、

「返せ。引き返せ」

といふ声が関勢の中から起つてゐた。

何程も経たないうちに、また下条方の武士たちは駈け出し、十人程の関方の武士がこれを追つた。そして数丁駈けた時、

「返せ、返せ」

また追撃をとめる声が聞えて来た。こんどは叫んでゐるのは騎馬武者だつた。十人程の関方の武士たちはここで初めて我に返つたやうに足を停めた。足を停めると、急に深追ひした怖ろしさが、彼等を押し包んだ。こんどはいつせいに方向を変へると、今まで自分たちが走つて来た道を一目散に駈け出した。

併し、この時、この命令に従はない雑兵が一人だけゐた。生れて初めて合戦といふものに出た小野村の百姓惣十の倅の犬坊だつた。

犬坊は十七歳といふ年齢に似合はない六尺近い躰を少し前屈みにして、ひどく大きな刀を右肩にかついで、下条勢の最後尾から四五間離れたところを駈けてゐた。彼はただ一人になつてから数丁程の道を駈けた。と言つても駈けづめに駈けたわけではない。時々足を停めては、岩のやうな頑丈な胸を大きく波打たせ、横腹の痛みのをさまるのを待ち、それから改めてまた駈けたのである。そして逃げて行く下条勢の後尾にもう少しで追ひつくといふところで、残念なことには彼はまた横腹を押へた。

そんなことを何回か繰り返してゐる時、犬坊はふいに自分が追つてゐる下条勢の最後尾の三人の雑兵がふいに立ち停まるのを見た。

犬坊もはつとして立ち停まつた。三人の雑兵たちは不審さうに犬坊の顔を見守つた。

「おぬしはたれぢや」

相手の雑兵の一人は息をはあはあさせながら言つた。

「小野村の犬坊だ」

「小野だと？　すると、関の手の者か」

まさか敵だとは思つてゐなかつたらしい。

「さうぢや」

犬坊は言つた。そして言ふと一緒に犬坊は肩に担いでゐた大刀をそのまま真直ぐに振り降ろした。刀は相手の脳天を割つた。断末魔の悲鳴を上げて、雑兵はのけ反つて倒れた。ほんの一瞬の出来事だつた。驚いた他の二人は一緒に斬りかかつて来た。犬坊は一步退つて大刀を横に払つた。悲鳴が相手の二人から同時に起つた。一人は片足でけんけんをして五六歩飛んで行き、一人はびつこを引いて駆けて、道端の松の木の幹に抱きついた。二人共、犬坊の刀の切先で脛に傷を負つたのである。

犬坊は倒れてゐる雑兵に近づき、相手が全く息絶えてゐることを確めると、その牀の上に馬乗りに乗つた。そして菓切庖丁でも使ふやうに、刀身を水平にして両手を当てがひ、その首を斬り落した。この仕事に犬坊は思つたより長い時間を費した。そして彼が雑兵の首を相手の纏つてゐた衣類で包み、それを持つて立ち上がった時は、もうどこにも他の二人の雑兵の姿は見えなかつた。そこらの田圃の畔の間にも匿れてしまつたものらしかつた。

犬坊は首級の布包みを小脇に抱へると、ここで初めて味方のある和知野の方へと引き返し始めた。先刻と同じやうに、彼は駆けたり、停まつたりした。道はひどく長かつた。それもその筈、城から三里近く離れてゐる粟野原まで知らないうちに長追ひしてゐたのであつた。

一里程戻つて道が二股に岐れてゐるところまで来ると、犬坊は道端の叢の中へはいつて行き、そのあたりをごそごそやつてゐたが、やがて一個の首級を草の中から拾ひ上げた。先刻ここで敵の一人を斬つて、その首を叢の中に匿しておいたのである。

犬坊はそれから駆けるのをやめて、のろのろと歩いた。首級を二個抱へてゐるので歩きにくかつた。幾つかの小さい部落を過ぎたが、どこの家も固く戸締りがしてあつた。

犬坊は一軒の旧家らしい大きい構への家の前庭へはいつて行くと、建物を左の方へ廻つて背戸へ出た。彼は水が飲みたたくて井戸を探してゐるのであつたが、井戸は見当らなかつた。